

■□ 開会挨拶

若林 靖永（くらしと協同の研究所理事長）



本日は第27回総会記念シンポジウムにお集まりいただき、ありがとうございます。

くらしと協同の研究所は西日本を中心とした生協の皆さん及び生協と関わる市民や研究者の皆さんが、協同組合、くらし、地域等に注目した研究や学び合いを広げようということで設立され、今日に至っています。私も2年前に理事長になり、大きく変化する現代の社会環境のなかで求められる課題に対して、協同組合や市民の皆さんと一緒に進んでいけるような研究所でありたいと願い、新しい体制で取り組みを進めてまいりました。

本研究所の事業のなかで最も重要で、会員や非会員に最も広くアピールする役割を果たしてきたのが、総会記念シンポジウムです。くらしと協同の研究所が皆さまと一緒に、現代の課題にどう立ち向かおうかということで学び合い、励まし合い、さまざまな課題を受け取って次へ活かしていく場として取り組んできたものです。

本日のテーマは「“見えない”格差・困窮・貧困と日本経済を考える－働き、学び、育て、暮らす現場の視点から－」です。この内容そのものについては、この後、松尾先生の講演もあれば解題もありますし、ディスカッションの後には、このシンポジウムを準備されてきた加賀美先生のまとめもありますので、なぜこれを準備してきたのかについては触れられることも多くあるかと思っています。

私から、一点だけ挙げておきますと、現代の社会・経済活動においてSDGsが、大

きな課題として、取り組みの大きなスローガンのひとつであり、具体的な戦略、実践的な目標として取り組まれるようになっていきます。

SDGsは、ご存じのように、その前身のMDGsとは違いまして、先進国を含むあらゆる国での取り組みとして展開されているところが特徴です。このSDGsのトップにあるのが「貧困をなくす」です。人間が人間として生きていけない最低の状態から地球上に暮らすすべての人々を救い出すことは、最も上位の優先すべき国際的な目標であることが確認されているのです。

もちろん、そのなかではっきりしているのは1日平均1.25ドル以下での生活と言われる明らかな貧困ですが、同時に、あらゆる国で各国定義の貧困を半減させるというテーマも含まれています。ですから、これは、いわゆる貧困国、後発の発展途上国のみを示しているのではなくて、現代日本の私たちの課題でもあるという見方が重要なのだと思います。

この“見えない”“見えにくい”、そして「見たくない」と目を背けているかもしれない現代日本の貧困のありようと、それに対する取り組みを考えることは、SDGsの1番目の大きなテーマに私たち日本社会・日本人がどのように取り組むのかということにも関わってくると思います。

そういうことで、きょうはこのテーマで学び合い、考えて、ぜひ皆さまそれぞれの現場の取り組みに次の課題としてつなげていただければと思います。